**聖霊降臨節第20主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 2024年9月29日**

**「その日、その時をただ神が知る」**

**ルツ記１章１～22節**

 **1:1 士師が世を治めていたころ、飢饉が国を襲ったので、ある人が妻と二人の息子を連れて、ユダのベツレヘムからモアブの野に移り住んだ。**

 **1:2 その人は名をエリメレク、妻はナオミ、二人の息子はマフロンとキルヨンといい、ユダのベツレヘム出身のエフラタ族の者であった。彼らはモアブの野に着き、そこに住んだ。**

 **1:3 夫エリメレクは、ナオミと二人の息子を残して死んだ。**

 **1:4 息子たちはその後、モアブの女を妻とした。一人はオルパ、もう一人はルツといった。十年ほどそこに暮らしたが、**

 **1:5 マフロンとキルヨンの二人も死に、ナオミは夫と二人の息子に先立たれ、一人残された。**

 **1:6 ナオミは、モアブの野を去って国に帰ることにし、嫁たちも従った。主がその民を顧み、食べ物をお与えになったということを彼女はモアブの野で聞いたのである。**

 **1:7 ナオミは住み慣れた場所を後にし、二人の嫁もついて行った。故国ユダに帰る道すがら、**

 **1:8 ナオミは二人の嫁に言った。「自分の里に帰りなさい。あなたたちは死んだ息子にもわたしにもよく尽くしてくれた。どうか主がそれに報い、あなたたちに慈しみを垂れてくださいますように。**

 **1:9 どうか主がそれぞれに新しい嫁ぎ先を与え、あなたたちが安らぎを得られますように。」ナオミが二人に別れの口づけをすると、二人は声をあげて泣いて、**

 **1:10 言った。「いいえ、御一緒にあなたの民のもとへ帰ります。」**

 **1:11 ナオミは言った。「わたしの娘たちよ、帰りなさい。どうしてついて来るのですか。あなたたちの夫になるような子供がわたしの胎内にまだいるとでも思っているのですか。**

 **1:12 わたしの娘たちよ、帰りなさい。わたしはもう年をとって、再婚などできはしません。たとえ、まだ望みがあると考えて、今夜にでもだれかのもとに嫁ぎ、子供を産んだとしても、**

 **1:13 その子たちが大きくなるまであなたたちは待つつもりですか。それまで嫁がずに過ごすつもりですか。わたしの娘たちよ、それはいけません。あなたたちよりもわたしの方がはるかにつらいのです。主の御手がわたしに下されたのですから。」**

 **1:14 二人はまた声をあげて泣いた。オルパはやがて、しゅうとめに別れの口づけをしたが、ルツはすがりついて離れなかった。**

 **1:15 ナオミは言った。「あのとおり、あなたの相嫁は自分の民、自分の神のもとへ帰って行こうとしている。あなたも後を追って行きなさい。」**

 **1:16 ルツは言った。「あなたを見捨て、あなたに背を向けて帰れなどと、そんなひどいことを強いないでください。わたしは、あなたの行かれる所に行き／お泊まりになる所に泊まります。あなたの民はわたしの民／あなたの神はわたしの神。**

 **1:17 あなたの亡くなる所でわたしも死に／そこに葬られたいのです。死んでお別れするのならともかく、そのほかのことであなたを離れるようなことをしたなら、主よ、どうかわたしを幾重にも罰してください。」**

 **1:18 同行の決意が固いのを見て、ナオミはルツを説き伏せることをやめた。**

 **1:19 二人は旅を続け、ついにベツレヘムに着いた。ベツレヘムに着いてみると、町中が二人のことでどよめき、女たちが、ナオミさんではありませんかと声をかけてくると、**

 **1:20 ナオミは言った。「どうか、ナオミ（快い）などと呼ばないで、マラ（苦い）と呼んでください。全能者がわたしをひどい目に遭わせたのです。**

 **1:21 出て行くときは、満たされていたわたしを／主はうつろにして帰らせたのです。なぜ、快い（ナオミ）などと呼ぶのですか。主がわたしを悩ませ／全能者がわたしを不幸に落とされたのに。」**

 **1:22 ナオミはこうして、モアブ生まれの嫁ルツを連れてモアブの野を去り、帰って来た。二人がベツレヘムに着いたのは、大麦の刈り入れの始まるころであった。**

**マタイによる福音書24章36節**

**24:36 「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。ただ、父だけがご存じである。**

1.

**非常に暑かった夏もようやく終わりを迎え、実りの秋になりました。日が随分と短くなりました。気温も朝は寒いくらいになりました。これからまた厳しい寒さの冬を迎えようとしています。今日は9月29日、明後日はもう10月になります。今年も残すところあと3カ月となりました。**

**今年は新年早々の1月1日に能登半島地震が発生し甚大な災害となりました。多くの方が命を落とされ、今なお厳しい生活をせざるを得ない方々が多くおられます。その被災地の能登半島を先日豪雨が襲いました。ようやく少し前を向いて歩み出そうとされている方々の気持ちをくじくような辛い出来事です。テレビでニュースを見ていましたら、奥様が安否不明の男性が取材されていました。「地震に続き洪水で何で二度もこんなひどい目に遇わなければいけないのか」と涙を流されていて私は大変心が痛みました。もし自分が同じ目に遇ったらどんな気持ちになるだろうか。あるいはもし自分がその場にいてその男性に声を掛けることができたとしたら果たして何と声を掛けることができるだろうか。そのようなことを考えさせられています。**

**私たちが人生の歩みを進める中で思いもよらない辛く苦しい出来事を経験します。今回のような災害もそうですし、大切な方の死を経験します。自分や家族が大きな病気を患うことがあります。仕事が上手くいかないだけでなく仕事をなくしてしまうことがあります。これからどうやって生きて行こうと途方に暮れることがあります。そのような時に私たちは「神様なぜですか。なぜ私がこのような辛い目に遇わなければいけないのですか」と神様に辛さや悲しみをぶつけると思います。あるいはあまりに理不尽なことが続く中で「何か自分が悪いことをしたから神様に罰せられている」と思う方もおられるかもしれません。そして、もしかしたらあまりの辛さや苦しさから神様から気持ちが離れてしまう人もいるというのも事実ではないかと思います。**

**辛く苦く悲しいことが多いこの世の中にあって私たちはどのように歩めばいいのでしょうか。共に御言葉に聞いていきたいと思います。**

**今日から主に第５主日にはルツ記を共に読んでいきます。ルツ記はモアブ人女性であるルツとルツからすると姑のナオミを中心に話が進んでいきます。わずか4章しかない短い物語ですが、ルツ記の最後に「エッサイにはダビデが生まれた」（4：22）とありますように、この物語がダビデ王の誕生に繋がっていくのです。そしてダビデ王に繋がるということはその子孫であるイエス様に繋がっていく物語なのです。**

**ユダのベツレヘムに住む、エリメレクとその妻ナオミと、二人の息子マフロンとキルヨンの平凡と言っていい4人家族が飢饉の食糧難のためにベツレヘムからモアブの地に移り住みました。死海の東側に位置するモアブは決して肥沃な土地というわけでもなかったそうですが、それでもベツレヘムにいるよりはましだったのでしょう。また、モアブ人はアブラハムの甥であるロトとその娘の近親相姦によって生まれた子どもであるモアブを祖とする人々です。またモアブ人はケモシュという異教の神を崇めていたのです。ユダヤ人はその出生の理由と異教の神への信仰からモアブ人を忌み嫌っていました。ユダヤ人とモアブ人は決して良好な関係ではなかったのです。ちょうどイエス様の時代のユダヤ人とサマリア人の関係のようです。**

**エリメレクたちが食べ物がないからといって異邦人の地異教の地であるモアブに移り住んだのはよっぽどのことだったのでしょう。一家はようやく食べるものも手に入ってここ異国の地で幸せに暮らせると信じていたのでしょう。しかし、一家の大黒柱のエリメレクがまだ若くして亡くなりました。二人の息子マフロンとキルヨンはそれぞれモアブ人女性であるオルパとルツと結婚しました。今度こそ本当に幸せになれる信じていたでしょう。しかし、10年しても子どもは与えられずに、マフロンもキルヨンも亡くなりました。年老いた母ナオミと長男の妻のオルパと次男の妻ルツの女性ばかり3人が残されました。ナオミからすると「夫だけならまだしも愛する子どもたちまで主は命を取られた。一度ならずも二度までも。何で私ばかりがこんな目に遇わなければいけないのか」辛く苦しい現実に毎日泣くことしかできなかったと思うのです。**

**でも、残された者は生きていかなければなりません。この当時女性だけで生きていくなんて今以上に厳しい社会です。おそらくその日の食べるものにも困る、非常に貧困な家庭がここにありました。これではナオミだけでなく、オルパもルツもモアブの地で飢え死にしてしまうのです。それもいいかとナオミは思ったかもしれませんが、ナオミは立ち上がります。生まれ育った町ベツレヘム、本来夫と息子たちと幸せな家庭を築いているはずだったあのベツレヘムの地へと帰るのです。それは「主がユダヤの民を顧みて下さり食べ物をお与えなった」と噂で聞いたからです。**

**オルパとルツもナオミに着いていきます。ナオミは二人をねぎらって自分の家に帰るように促しました。「主があなたたちを報いて下さるように。主がそれぞれに新しい嫁ぎ先を与えてくださるように。」ナオミはユダヤ教の規定をもとに二人の嫁を説得します。「主の御手がわたしに下されたのですから」オルパはナオミの説得に応じて自分の家に帰りました。しかし、ルツは帰りません。**

**「あなたを見捨て、あなたに背を向けて帰れなどと、そんなひどいことを強いないでください。わたしは、あなたの行かれる所に行き／お泊まりになる所に泊まります。あなたの民はわたしの民／あなたの神はわたしの神。**

 **あなたの亡くなる所でわたしも死に／そこに葬られたいのです。死んでお別れするのならともかく、そのほかのことであなたを離れるようなことをしたなら、主よ、どうかわたしを幾重にも罰してください。」（1：16～17）。**

**異教の神ケモシュを信じるモアブ人女性であるルツが天地の造り主である父なる神様、姑のナオミが信じる神様を「わたしの神」と信仰の告白をしたのです。**

**ナオミとルツはベツレヘムに帰りました。町の人たちはどよめきました。ナオミは「ナオミ（快い）などと呼ばずにまら（苦い）と呼んでください。全能者が私をひどい目に遇わせたのです。主が私を悩ませ、全能者が私を不幸に落とされたのですから」と主なる神様によってこのような不幸な目に遭わされたのだと嘆きます。ナオミの嘆きもわかるような気がするといっては失礼になるのかもしれませんが、夫に先立たれ子供二人に先立たれ夢見た幸せな家庭はもう築くことはできないのです。食べるものもないのです。神様は私から何もかも奪い去ったのです。主の御手が私に下された、このように神様に嘆きたいし嘆かざるを得ないのです。**

**ナオミはこのようなひどく辛く苦しい中でも他の誰でもない神様に嘆くのです。ナオミの嘆きの対象は神様なのです。ナオミはこのような状態でも神様への信仰を捨ててはいないのです。先ほどまでナオミの言葉をいくつか取り上げましたが、いつも「主は」とか「主が」と神様が主語の言葉が多いのです。私がではなくて主が。主なる神様への信頼がなければ出てこない言葉です。さらに、ナオミは神様のことを２度「全能者」という呼び方をします。「全能者」（シャダイ）は、神がそうなさろうと決めたならば、誰も押しとどめることはできない、誰も抗うことはできないという神の御力を表わす言葉です。神様は主権者であり、その御力をもってご自身の意志をことごとく実行される。たとえその御業の意味がわからなくとも、神様はこの出来事を通して何かをなそうとされている、その御心を祈り求めて謙虚に受け止めていくのです。つまり、ナオミは神様への深い信頼があるからこそ神様に嘆くのであり、その嘆きは祈りと言っていいと思うのです。嘆きつつ祈りつつ従って歩んでいくのです。**

**「ナオミはこうして、モアブ生まれの嫁ルツを連れてモアブの野を去り、帰って来た。二人がベツレヘムに着いたのは、大麦の刈り入れの始まるころであった。」22節の言葉です。一見するとなんて事のないただのまとめの言葉に思えます。しかし、ここに神様は大きな希望を与えておられるのです。ベツレヘムに着いたのはナオミだけではありません。何もかも主が奪い取ったと思われたナオミに信仰の家族、神の家族が与えられています。「あなたの神はわたしの神」と同じ神様を主と告白するルツが一緒なのです。それはルツも同じです。見ず知らずのベツレヘムの土地にたった一人で立つのではありません。同じ信仰を持つナオミが共にいるのです。そう「一人」ではなくて「二人」なのです。共に祈り合える二人でベツレヘムに着いたのです。**

**その時は「大麦の刈り入れの始まるころ」です。だいたい4月ごろです。もし二人の到着が冬の寒いころだったら、何も作物が採れないころだったら、たとえ二人であっても食べ物を手に入れられたかわかりません。それが「大麦の刈り入れの始まるころ」なのです。この時に「二人で」ベツレヘムに着いたからこそ、この後食べるものを手に入れることができたし、何よりもルツが大麦の落穂拾い行くことができる時期だったからこそ、大きな出会いを神様は備えていてくださるのです。ここに神様の大きな導きがあるのです。**

**神様を信じていても、イエス様の十字架と復活を信じてイエス様が救い主ですと信仰の告白をして教会に繋がって歩んでいても私たちには辛く苦しく悲しい出来事があります。「神様が私から何もかも奪い去れらた」と思う時があるかもしれません。けれども、私たちは決して一人ではありません。何もかも奪い去られたと思っていたナオミにルツが共にいるように、私たちは決して一人ではないのです。神の家族、信仰の兄弟姉妹がいるのです。共に祈り合える仲間がいるのです。誰よりも私たちを愛し、私たちのために十字架にかかってくださったイエス様が私たちと共に歩んで下さるのです。そして私たちはイエス様と共にそして神の家族、信仰の仲間と共に「大麦の刈り入れの始まるころ」を歩むのです。神様が何かをなそうとしておられるのです。今の私たちにはわからなくとも、「その日、その時をただ神が知る」なのです。神様を信頼して祈りつつ歩んでいきましょう。**